

守屋荒美雄と帝国書院

「地理教育の父」の足跡を旅する

伊藤 智章

第1回 東京・神田神保町 帝国書院本社

帝国書院の創業者、守屋荒美雄（もりやすさびお）の伝記を書こうと思う。ただ彼の人生を時系列で追うのではなく、彼が拠点を置いた各地に足を運び、そこから見える景色から、このたぐいまれな人物の生涯をたどってみたい……そんな思いに駆られ、帝国書院の本社を訪ねた。（写真1）



写真1 帝国書院本社と玄関前の銅像

「行く？」 「もちろん！」

2010年7月の終わり。その日は会社にとっては特別な日だった。守屋美佐雄相談役（前社長：荒美雄の孫）の顔はほころんでいた。真っ白なワイシャツ、ノーネクタイの相談役の顔は真っ黒に日焼けしている。社員とすれ違うたびに「いやー、やりましたね」「行く？」

「もちろん」の会話。実は前日、高校野球の東東京大会の決勝戦が神宮球場であり、守屋荒美緒が創設にかかわった学校の1つである関東第一高校が優勝したのである。「行く？」とは、もちろん「甲子園」のこと。その後、同校はベスト8に入った。

昨年、社長を辞して相談役になった美佐雄氏。守屋荒美雄の孫だが、会社の5代目社長である。若いころは、教科書見本を車に詰め込んで、各地を営業して周ったとのこと。

「社長をやってみて、荒美雄さんの考えがようやくわかってきた」と、今は荒美雄ゆかりの史料の収集にも尽力されている。

2枚の絵画と書棚

守屋相談役の案内で、会議室と社史編纂室を見せてもらった。

初代、守屋荒美雄が67歳でその生涯を閉じたのが昭和13年（1938年）である。彼が生前準備していた自叙伝の原稿や、ゆかりの人々の寄稿をまとめて昭和16年（1941年）に自費出版された「守屋荒美雄傳」が、今のところ唯一の伝記である。

彼は、生涯200冊を超える教科書を書き、自ら雑誌「地理学研究」を創刊して、文検（文部省中学校教員資格認定試験）受験者や若い地理教員を鼓舞した。荒美雄自身もこの試験にパスして小学校卒の学歴で中学校教員になっている。37歳で独逸協会立中学校（現：独協大学付属高等学校）の地理教諭を辞して執筆活動に専念した荒美雄。46歳で帝国書院を起業して以後も、主筆として帝国書院を牽引した。

守屋相談役は、社長時代から、祖父の業績に目を向け、それまで散在していた荒美雄に関する資料の収集を始めた。同社OBで特別顧問を務める荻野和一郎氏が中心となって、全国の古本屋を渡り歩きながら集めた資料は、社史編纂室の書庫に収められているが、まだまだ集めきれないとのことである（写真2）



写真2 守谷荒美雄が執筆した教科書類

会議室では、守屋相談役が社長時代に作ったショウケースに収められた2枚の絵を見せてもらった。1枚は、油彩の荒美雄の肖像画、もう一枚は大きな屏風に貼られた水墨画である（写真3、4）。

肖像画の荒美雄は思いのほか若い。帝国書院のWebサイトや『守屋荒美雄傳』で見る写真（おそらく60代）よりもふっくらとした印象で、顔にあどけなさすら感じる。正装し、口ひげを蓄えているが、筆者は妙に親近感を感じた。起業直後、あるいは起業前の姿かもしれない。



写真3 守屋荒美雄の肖像画



写真4 犬養毅首相から贈られた水墨画

水墨画は、宰相・犬養毅から送られたものである。犬養毅は安政2年（1855年）生まれ。荒美雄よりも14歳年上である。犬養毅の故郷は現在の岡山市北部で、守屋荒美雄の故郷は現在の倉敷市西部である。守屋相談役によると、荒美雄は、中国大陸の地誌に関する研究を熱心に行っており、やはり中国に関心をもっていた犬養毅とは、同郷の縁もあつ

て親しく意見を交換することが多かったのではないかとのことである。実際、荒美雄が41歳の時に著した『動的支那地理』（1913年）では、序文を犬養毅が書いている。日本人が大陸へ進出しようとしていた時代、日本はこれからどうあるべきか、未来を担う若者にどのような地理教育を授けるか、2人は熱く議論を戦わせたのかもしれない。

「帝国」の屋号

「帝国」という言葉には、どことなく軍国主義的な香りが漂う。「屋号のおかげで終戦直後は学校の先生から『お前のところの教科書なんか買ってやらん』と先輩方がいじめられた」とのエピソードを、後に紹介している⁽¹⁾が、荒美雄自身がなぜ「帝国」という語を用いたのか、はっきりとした資料は今のところ見つかっていないとのことである。

社史編纂室の荻野顧問によると、創業者の荒美雄が会社を立ち上げた頃は、「帝国」という言葉はもう少し柔らかな、新進気鋭の響きで用いられていたようである。今でいう「国際」や「グローバル」といった語とほぼ同義とみてよいのではないかと思う。

会社の屋号に「帝国」の語を当てた荒美雄自身は、むしろ反体制、反権威の人だった。正規の師範学校教育を経ずに資格認定試験で小学校教員および中学校教員になったという経歴も影響しているのかもしれないが、彼は行く先々で校長と衝突している。

『守屋荒美雄傳』によれば、当時の地理の教科書は、帝国大学の有名な教授が、小難しい文章で自然地理を中心に記述した内容のものばかりであったため、彼自身はほとんど授業で使わなかったようである。教科書はおろか、ノートも持たずに身一つで教室に向かう荒美雄を見て、校長が咎めると、荒美雄は激怒して「教科書は自分で書いており、内容はすべてこの頭の中に入っている！」と一喝したという。

33歳のとき、荒美雄は出版社「六盟館」から、初めての地理の教科書を出版するが、挿絵や主題図を豊富に取り入れ、経済や人文地理的な話題をふんだんに入れた教科書は大

ヒットした。社史によると、明治 38 年（1905 年）の 1 年間だけで荒美雄は中学校用、女学校用、師範学校用の「日本地理」および「世界地理」教科書と、「日本地図」「世界地図」の執筆と出版を手掛けているが、この年に六盟館から彼に払われた印税は、当時の額で 600 円にのぼった。

「荒美雄は、教科書のタイトルによく『動的』という語を用いているけど、『今までの古い教科書は動きがなくて面白くない』と暗に言っているわけですから、かなり挑戦的ですよね」と荻野顧問。「明治生まれ」の若手が、既存の権威に楯つきながら世に出るべく挑戦を始めた時代だったのかもしれない。

ちなみに、荒美雄が最初に教科書をヒットさせた年、日露戦争は「日本海海戦」でクライマックスを迎えるが、この時作戦参謀を務めた秋山真之は 38 歳。慶応 4 年＝明治元年（1868 年）生まれである（2）。荒美雄と同じ明治 5 年生まれの有名人には、作家の樋口一葉、戦後最初の総理大臣の幣原喜重郎がいる。

「地理教育の父」を訪ねる旅へ

守屋荒美雄という、稀代の地理教育者の歩いた場所と時代を歩く。まずは生誕の地である倉敷から小学校教員・青年校長として活躍した岡山県内をまわる。不本意な理由で小学校教諭を辞した荒美雄が今でいう「フリーター」生活を余儀なくされた神戸・大阪をまわった後、「文検合格」の新たな志を持って上京し、多くの仲間を得た東京・本郷かいわい、合格後、初の任地となった青森師範学校、そして教員としての彼がもっとも充実していたであろう独逸学協会学校（現：獨協中学・高等学校）そして起業を果たすまでの足取りを追う。

今、日本の地理教育は何とも言えない閉塞感に包まれている。とくに、高等学校での「地理必修」がなくされて以降、高校で地理を習った生徒も、地理の教員になりたい学生も減

っていくばかりである。若い教員は、事務作業や部活動に追われて学業や地域とのかかわりから遠ざけられ、日々のルーティンワークをこなすなかで、働きがいや、教師としての将来像を見出だせない時代になってしまっている。

筆者は今 37 歳である。この連載を通じて、日本の地理関係者、とくに 30 代以下の若手を鼓舞したい。また日本が否応なしに「世界」とつながり、「地理」はどうあるべきかが真剣に議論された明治末から大正を見つめることで、混沌として先行きの見えない新世紀初頭の現代における地理教育の在り方を考えてみたい。

日本を半周して、もう一度神田に帰ってきたときに何が得られるか、ぜひ楽しんで読んでいただければ幸いである。

[注]

(1) 守屋美佐雄 (2010) 社名の由来—帝国書院 出版クラブだより 2010 年 7 月号

(2) 1868 年は、9 月 7 日までが慶応 4 年、9 月 8 日から明治元年としている。秋山真之は 3 月 20 日に生まれた。

いとうともあき・静岡県立吉原高等学校教諭 1973 年静岡県生まれ。立命館大学大学院地理学専攻博士前期課程修了。著書『いとちり式 地理の授業に GIS』古今書院。GIS や防災、地域振興と地理教育などに関する論文・コラム多数。

ホームページ「いとちりポータル」

<http://www.itochiri.jp>